

突、さらに米空母機の爆撃により航行不能となり

ミンダナオ海カミングイン島付近で雷撃処分。

十九年十二月二十日 除籍

佐世保鎮守府

第五特別陸戦隊

ニューギニア戦記

高知県 岡田浩揮

私は大正十（一九二一）年八月十三日、高知県吾川郡吾北村小川（旧小川村）で生まれたが、今の若い人達のような幸福な時代からみれば、想像のつかぬような苦しい日々であった。当時の軍隊は、今の自衛隊のような、何年もほとんど自分の意志が尊重される時代とは違い、国民皆兵の時代で、満二十歳になれば徴兵検査を受け、軍隊に入ることが義務であった。

しかし、私どもは、生まれ落ちると同時にそのような状態に慣らされる教育を受けていたので、当時とし

ては苦しいとは考えていなかった。むしろ、日本国のためということ、自分から進んで、志願して軍隊に入った人々もたくさんいた。

我々海軍陸戦隊員は、昭和十八（一九四三）年五月末、ニューブリテン島ラバウルから前進命令を受け出港して一週間、「イ号第三八潜水艦」の陸戦隊員室にいた。艦は上空の敵偵察機に航跡を発見されたため、潜望鏡で嚴重に監視を続けながら潜航して進むので、上下左右から水圧を受け、微動だにしないが、船内はまさに蒸し風呂同然である。僅かに太陽灯と呼ばれる白色光の下で、乗務員は皆禰一本で狭い艦内でそれぞれの部署を守っている。

便乗の我々陸戦隊員は、眠る以外は仕事がない。額や首筋から、玉のような汗を流しながら、うなされる毎日が続いていた。

突然「総員起こし！ 陸戦隊員は直ちに上陸の準備せよ！」伝声管からけたたましい起床の音が流れる。「いよいよ来た！ 我々の決戦場ニューギニアに！」。

心の底からこみ上げてくる勇氣と、激しい緊張の中で

上陸準備をするのもどかしかった。

命令一下、たちまちの間に室内は片付けられ、各自上陸準備をする。艦が大きく揺れはじめ浮上した。潜水艦の乗員がハッチから甲板に出る。外は真つ暗だが、とたんに外気が流れ込んできた。うまい……。新鮮な空気の味がこんなにもうまいとは。伝声管から命令が流れる。

「陸戦隊員は、輸送してきた武器弾薬を速やかに上甲板まで運び出せ。灯を絶対に外に漏らすな、足元に注意して事故を起こさないようにせよ！」

銃弾がぎゅっしり詰まった木製の弾薬箱、小銃を詰めた箱の重さがずゅっしりと肩に食い込む。その他缶詰のいっばい入った食糧箱等。他の軍艦に比較し、特別に狭い潜水艦では通路といわず、隙間さえあれば所構わず積み上げられた。その箱々、いずれも重量物ばかりである。これを暗闇の中で荷役するのだ。

「オイ岡田一水！ 貴様達若い者は、上甲板に上がって下から持ち上げる木箱を甲板に整理して積み重ねろ」先任下士官の声が飛ぶ。私は同年兵七、八人と

共にハッチから上甲板に踊り出た。

南海の朝風がサッと気持ち良く頬を撫でる。胸を張って深呼吸をしたいがその暇はない。一方、艦内は既に戦争のような騒ぎで、汗みどろになりながら木箱を繰り出して来る。甲板上では我々は重い木箱を素早く次々と整理してゆくが、真つ暗で手探り作業だ。

「陸戦隊員は急ぎ運搬を終了せよ！ 明るくなると敵機の来襲があるので、艦は至急潜航しなければならぬ。逃げ！」作業中を目掛けて爆撃でも受けたらひとたまりもない。皆必死である。

程なく暗闇の彼方から、けたたましいエンジンの音を響かせて舟艇が近づいて来る。上陸用大発五隻であった。

士官等が甲板に現れた。大発（自動車）を艦の舷側にピツタリとつける。今度は甲板から大発へ危険な重量物運搬が始まる。「逃げ！ 逃げ！」先任下士官が声をからし叱責するが、艦も大発もうねりのため作業が進まない。

東の水平線が白みはじめた。誰も汗みどろで黙々と運ぶ。敵機の来ないうちに上陸しなければと心は焦る。ようやく荷物全部を大発に移したが、別の潜水艦甲板に、グリセリンをいっぱい塗り着けた「一五ミリ砲」を分解して固縛りしていたので、その積み替え作業の困難さは想像を絶するものであったと思われる。しかし、日頃の訓練とはいえ、ただ一個の荷物も海中に落すことなく、物資はことごとく小艇に積み替えられた。

夜が明けてきた。日前に陸地が浮かんで来た。同年兵の顔もはっきり見えてきた。艇が波打ち際に着くのももどかしく、我々は艇から踊り出た。ニューギニアへの第一歩である。これから続く死闘の連続は知る由もなく、我々は子供のよう小踊りして、上陸を喜びあった。

既に南国の空はすっかり明け、後統の大発も着き荷揚げが始まった。海岸に積み上げられた荷も熱帯樹林まで運び、それをトラックに積んで基地へ向かって運んで行くらしい。先任下士官の話では、これから最前

線よりやや後方のラエという補給基地へ行くとのことであった。

三隻の潜水艦で輸送された陸戦隊全員集合である。田中大尉は、整列した約三百人の隊員をグッと睨み回された。四十歳の坂を越された特務出身の隊長は、一週間の輸送の疲労は隠せないが、激しい気性を表わして部下を次のように叱咤激励した。

「我々は最後の御奉公の地ニューギニアにただ今第一歩を踏み入れた。私はもとより貴様たち士官、下士官、兵を問わず生きて再び故国の土を踏むと思うな。既に我々の先遣隊は、最前線サラモアで悪戦苦闘をづけながら、その基地を死守しておる。我々はこのたび増強部隊としてラバウルで日夜訓練し、鍛えあげられた戦力を十二分に發揮し、戦力の挽回に努めなければならぬ任務を帯びている。戦局は日増しに悪化し、決して予断を許されぬが、いつ、如何なる事態に立ち至っても最後の一兵に至るまで陣地を死守しなければならぬと銘記しておけ！」

我々一同は隊長を、まじろぎもせず見ながら、既に予測していたとはいえ、行く末は容易ならぬと覚悟をした。しかし、やがてそれが現実となってきたのである。

訓示後、我々は各班に分かれ、指揮小隊を先頭にして、ジャングルの中のトラック道を黙々としてラエ駐屯部隊の基地へ急いだ。沼地からおびただしい蛙の聲が響き、虫の声、小鳥のさえずり、しかし、何かしら不気味さを漂わせるジャングルである。ここを出るとパイナップル畑の開墾地へ出た。

基地らしい幕舎が点々と見える。ホッと一安心した途端に基地から警報サイレンの音、海岸方向から爆音が聞こえ始めた。「総員その場に退避！」伝令が叫ぶ。指揮小隊は既に畑の真っ只中で、遮蔽物は低いバインの幹しかない。我先にその場に伏したが、手にバインの刺が刺さって痛い。

ゴーンと耳をつんざく爆音と共に超低空で頭上を敵機が二、三機飛び去った。ダダダダ！と、幕舎付近

で機銃掃射の激しい音、ドドドドド！今度は友軍の基地からの応戦だった。基地は修羅場と化してしまった。我々若い兵隊はラバウルで夜間ボーイングB17、コンソリデーテッドB24の大型機の神経作戦爆を受けただけで、こんな身近に、しかも上陸早々不意の地上掃射にあつて面食らった。

再び爆音が近づく、我々が発見されたらおしまいだ。息を殺して見上げる中を、今攻撃したらしい三機の中機が、基地方面に銃弾を浴びせる。側に伏せていた兵曹が「ノースアメリカンB25だ」と小声でつぶやいていた。爆音と銃声が入り乱れる。私の土まみれの腕時計の針が、午前八時十分を指していたことを今でも覚えている。この銃爆撃は僅か十四、十五分そこそこと思われるが何時間にも感じた。

部隊がようやく勢揃いして基地に着いたのは、それから三十分後であった。基地は小高い丘にあり樹陰に幕舎が点在していた。椰子の幹に弾痕があり、硝煙の臭いも生々しかったが、平静そのものだった。

司令部近くの幕舎からひょっこり出て来た下士官風

の男が、部隊の小隊長を見て敬礼した。驚いたのは、青白く土色をし、少しむくんだ眼の周りには黒ずんだ隈ができ、頬はこけ、髪はぼうぼうとし年齢も定かでない。司令部付か何か事務系統の軍人と思われる。

指揮官から話を聞いた栄養失調とはこのことかと愕然とした。我々もやがて、このような姿になるのであるまいか。続いて五、六人の基地の兵が現れたが、皆瘦せこけて今見た下士官と同じように顔は土色である。誰一人として我々のように元気はつらつとした者はいない。長い間に幾度かマラリア、デング熱にかかり、食糧も少なく、泥水をすすりながら勇敢に戦ってきたニューギニア駐屯部隊の兵隊の真実の姿であった。幾万とも知れぬ日本軍が、こんな惨めな姿になって、果たして戦局を挽回することができるだろうか？これは我々陸戦隊の人達全員がのように思ったであらう。

我々は休養のため、五、六個の幕舎を与えられ分散して夕刻を待つこととなった。今度はここを出発し、

大発で目的地サラモアに向かうというのである。ラエもラバウルと同じように幕舎の中はマラリア蚊がブン飛び回り油断できない。熱気でむせ返るような中で、頭からスッポリと防蚊覆面をかぶり、両手に防蚊手袋をはめたままパネルの上でゴロリとなり、瞬く間もなく深い眠りに溶け込んで出発を待っていた。

暗夜に乗り出発し、幸いにも一人の犠牲者もなくサラモアの第一線に到着できた。天の橋立を思わせる細長い半島、内地の風景を思わせる地上の楽園だが、ここは連日死闘を続けるニューギニアの第一線である。我々は田中大尉の訓示にあるように「最後の一兵が倒れるまで、陣地を死守しなければならない任務を負わされているのである。銃後では前線の将兵の活躍を祈ってしてくれるのだ」と思うと身の引き締まる思いであった。

突如空襲警報が響き渡った。「総員配置につけ！」本部前高台の機銃陣地から、けたたましい連続発射音が鳴り始めると同時に、各所の陣地が一斉に火蓋を切った。西北の山頂の上から敵機が大きく姿を現わし

た。真つすぐ半島の中心部めがけて進んでくる。毎日、毎日のポートモレスビーから来る殺屋の定期便（と呼んでいた）である。機銃弾など物ともしないふてぶてしい態度で迫る黒ずんだ胴体は我々を威吓する。

私が戦闘配置として与えられた本部前の高台の陣地は、今までの戦闘ごとに、敵の最大の攻撃目標になっているという。我々新参者が、生と死の境に、初めて直面した実戦である。私は無我夢中になって、頭の中がボーとなって、自分の行動が全然わからない。今まで「冷静かつ敏速に」と教えられ訓練されていたが、いざ実戦となるとでんで役にたたない。

射手と補助員は、二等兵曹と兵長が当たり、指揮は兵曹長で、皆平靜そのもので目標に向かって勇敢に射ちまくる姿を見て不思議に思う。上等水兵と私を含む二人の新兵は、必死で機銃弾を補給する。来た！先頭から二番目の一機が、反転しながら突っ込んで来る。真正面からだ、機体が見る見る大きく視界いっぱい

いに広がって来る。瞬間、射手も補助員も、機銃台にガバツと伏せた。同時に我々もその場に伏せる。「ゴオー」と旋風のような爆音が、頭上を吹き抜けた。ハツと気が付いて立ち上がると、既に射手は何事もなかったような顔をして、次の目標に向かって撃ち続けている。歴戦の勇士の度胸に舌をまいて驚いた。

連続三十分間だったというが、何を考え、如何に動いたか？ 全然記憶にない。戦いは済んだ。

「オイ新兵、貴様達驚いたか？ これがサラモアの日課なんだぞ」。午前一回、午後一回のモレスビーからの定期便だ。「ヤンキー娘に伝言があれば頼んでおけ。ハハハハ」と豪快に兵長は笑った。たった今まで生死の境にあった人とは思えない。生まれて初めて体験した極度の緊張のため、興奮はいつまでも醒めなかった。

空襲は次第に熾烈さを加えてきた。上陸以来約一カ月の間の、サラモア半島の変わり方は、想像を絶するものであった。毎日二回の定期便は三回になり、その間隙を縫って、空の要塞といわれるボーイングB17や、

尾翼が二つに分かれたコンソリーデーデットB24の大
型爆撃機が、一トン爆弾を次々と投下し、砂原に直径
二、三〇メートルの大穴をあけ、狭い半島は分断され
る状態になり、一カ所だけの復旧でもトラック数百台
分の砂を必要とする作業に追いまくられる始末となっ
てきた。椰子の美林も次々と銃弾になぎ倒され、皮肌
をさらし出し見るも無惨な形相になってしまった。

疲れ果てた兵員は、対空戦闘の間を見て、土工に
早変わりし、道路復旧作業に全力をかたむけたが、後
から後から補給を続けても、米軍の物量戦の前には、
不屈といわれる精神力にも限界が生じてきた。上陸当
時、はちきれするような元気者のN兵長も、食糧不足
と、この地特有の下痢に悩まされ、げっそりややつ
れ、目玉ばかりギョロギョロ光りはじめた。

昭和十八年六月三十日、我々にとっては忘れられな
い惨事が起こった。同日未明、霧雨の中で爆音が聞こ
えた。「空襲！」幕舎の中で誰かが叫んだ。と同時に、
ダダダ…と、全く予想もしない時刻の襲撃に、あわて

ふためいた兵員は、我先に退避壕になだれ込む。とた
んに天地をゆるがすような轟音が起きた。さしもの頑
丈な椰子の幹の三段葺きになっていた地下退避壕の天
井の砂がザッとふりかかって来た。

「至近弾だ」と入口の誰かが外に這い出した。と
「本部退避壕付近らしい」「大変だ！ 本部退避壕に、
直撃弾命中！ 指揮小隊全員集合！」。壕内は驚愕と
怒号に渦巻ながら先を争って外に飛び出した。生々し
い硝煙の臭いが鼻をつく。霧のためゼロに近い視界の
中で、右往左往と動く。私は、すぐ目と鼻の先にある
本部壕へ急いだ。既に、十四、五人が壕を取り囲ん
で、ガヤガヤ騒いでいる。我々が造った地下壕の五段
に組んだ椰子の大木が真二つに折れて見る影もない。
「中には司令月岡中佐と副官岡林大尉が確かに退避し
ておられるはずだ。どうぞご無事で……。」と。かすか
な望みを託して、祈るような気持ちでいっぱいだっ
た。

直ちに搬出作業にかかる。はやる心を押さえながら
一本一本折れた椰子の大木を静かに掘り起こす。ま

ず、岡林副官、続いて月岡司令、共に壮烈な戦死を上げられていた。不思議にも最後に救出された掌砲長は、かすり傷ひとつ受けていなかった。運命の支配にはただ驚くばかりであった。頼みの綱は二本一度に断ち切られた。士官も下士官も兵も、皆号泣した。

日本海軍陸戦隊に、その人ありと知られた歴戦の武人、人格高潔な月岡司令。海軍兵学校を抜群の成績で卒業し、前途有為な青年将校岡林大尉。戦いの重大局面にあたり、杖とも柱とも頼む御兩人を失ったことは、部隊の士気に重大な動揺を与えたのである。

七月中旬ラバウルから、豪放磊落、斗酒なお辞せずという豪傑肌のW中佐が司令として着任され、ようやく明るい雰囲気に戻って士気も再び盛り上がってきた。しかし、戦局は次第に悪化の一途をたどりつつあったようである。

七月二十五日、ココボ方面で盛んに砲声が聞こえる。陸軍部隊と敵の戦闘が続いているらしい。数日前までは、僅かに遠雷のように響いていた砲声が、だん

だん大きく聞こえるようになったのは、敵が近づき攻撃が激化したものと思われる。ジワジワと押し寄せる米豪軍は決して無理をしない。

まず、空爆で目的の地付近を徹底的にたたきつけ、さらに砲撃を加え、一人の日本兵もいないことを確かめた上でなければ、絶対に陣地確保しに出来ない。物量の相違である。その当時私は平常の勤務配置は、武器、弾薬の取扱いを受け持つ砲術科倉庫員であった。ラバウル―ラエ―サラモアへと制空制海権を押さえられた上の輸送は容易ではなく、長い間補給されないで、毎日残り少なくなっていく帳尻を計算するのは一番難しいことだった。担当の岡本兵曹と「何とか早く弾薬が届かないかな、このままでは砲弾は後一カ月位しか続かない」と言っていた。

今日、砲術長が「これから、高角砲弾を撃つ時は、一発必中でなければ撃ってはならない」と言われた。全く無理な話だが、これがサラモア陸戦隊の厳しい現実だ。我々末端の者には到底大局の動きは分からなかったが、その立場立場において少しづつ後退を余儀

なくされていることは、私の身にひしひしと感じとられた。

ニューギニアの戦闘は、日を追うごとに熾烈を極め、米空軍の爆撃も次第、次第にその回数も多くなり、我々兵員も対空戦に追いまくられた。しかし、今申したごとく、高角砲弾の残数は一カ月分位となり、陸軍部隊と米豪軍との戦闘による銃砲撃の轟音がサラモア半島までも遠雷のように聞こえるようになって来た。

このようにして、ニューギニア戦の前途は悪化していき、我が佐世保鎮守府第五特別陸戦隊は後退を命ぜられたのである。

【解説】

第五海軍陸戦隊 ニューギニア

「生きて帰らぬニューギニア」と言われたニューギニア戦は、陸・海共に悲惨な戦闘により多くの犠牲を払われた。ニューギニアの戦闘には、陸海軍共に多数

部隊が生命を賭して戦ったのである。

第五十一師団（基兵団）の部隊略歴の概要を左に記してみる。

〔第五十一師団司令部〕

昭和十六年八月二日 宇都宮 留守第五十一師団編成

〔第五十一師団部隊略歴〕

昭和十六年六月 神戸出発

十七年三月三日 ラバウル着

十七年二月～十八年二月 ラバウル

十八年三月 八一号作戦にてダムヒールにおいて

遭難

十八年三月～十八年九月 ラエ及びサラモア

十八年九月～十九年一月 サラケットを越えてキ

アリに転進

十八年十月～十九年三月 キアリ

十九年一月～十九年三月 キアリよりガリ、マダ

ン（以上「八一号作戦」ハンサを経てウエワ

クへ

十九年四月、二十年八月 ウエワク（金山ババラム、クソイヤム）

ダムヒール遭難

サラワケット転進（長距離、食糧不足、約四十日の機動）「八一号作戦」（ガリ転進、長距離、食糧不足、約五十日の機動）

十九年九月 食糧断絶期 以後栄養失調マラリア右のほか、空襲及マラリアによる損害は地域及時間の如何を問わず全期にわたり不断に多発せり。

このような状況は同師団歩兵团司令部の隷下部隊たる

歩兵第六十六連隊（宇都宮編成）

歩兵第一〇二連隊（水戸編成）

歩兵第一一五連隊（高崎編成）

は十七年三月、十八年二月、八一号作戦によりラ

エ前進の途中ダムヒール海峡において遭難（海没）大部戦死す。ダムヒールの悲劇と称されている。

野砲兵第十四連隊も、ダムヒール海峡において大部戦死す。

工兵第五十一連隊もダムヒール海峡において遭難。

第五十一師団通信隊、輜重兵第五十一連隊、

師団兵器勤務隊、第一野戦病院、第二野戦病院、

第三野戦病院、第四野戦病院、他も、同師団司

令部、歩兵团司令部同様の苦難の行動と多数の

戦没者を出したのである。

右は、地上部隊の一例として、基兵团の部隊概要をもつて参考とされたい。

海軍キスカ島防空隊

志願兵から帰還まで

石川 泉 伊藤 和夫

大正十五（一九二六）年五月二十六日、石川県現松任市宮永町の農家に生まれ、高等小学校を出ました。